

Title	星雲學者ドライヤー氏逝く (倍大號)
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1926), 7(71): 46-49
Issue Date	1926-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161072
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

星雲學者ドライヤー氏逝く

山 本 一 清



英國に於ける星雲學者として、又、天文史家として有名な John Louis Emil Dreyer (ドライヤー)氏が去る九月十四日オクスフォードの自宅で逝去した。學界の大なる損失である。

ドライヤー氏は元來デンマルク國の人であつて、其の家は代々有名な軍人を輩出してゐる。氏は1852年二月十三日デンマルク國のコペンハーゲン市に生れ、父は陸軍中將であつた。コペンハーゲン大學を卒業して後、氏は1874年から1878年まで四ヶ年間、英國アイアランドのロス卿の天文台の台員となつた。當時同所には金屬鏡六呎といふ世界第一の大望遠鏡が活躍してゐた時であつて、星雲の觀察が之れを以つて盛んに行はれてゐた。ドライヤー氏も勿論此の觀察に従事した、と同時に、他の學者たちの星雲觀察をも廣く調査し、比較研究して、幾つかの論文をアイアランド學士院の輯報(Transactions)に發表したことがあつた。1878年、氏はダブリン市外のダンシンクにある大學天文台の助手となり、暫く星雲の觀察を中止したが、後、1882年にはアルマー(Armagh)天文台の台長に就任し、自由な立場に立つて、再び星雲の研究をするに至つた。そもそも星雲や星團の研究は、第十八世紀末、井リアム・ハーシエルが三回にわたつて有名な目錄を發表して以來、各國の天文家が大に注意を拂ふやうになり、ジョン・ハーシエル、ダレスト、ロス卿等の人々が夥しい發見と觀察を行つた。しかし、此等の間には重複や混雜が多く、觀察の誤りや、不明瞭な記録なものなごも少なくなかつた。それで、ドライヤー氏は新しく十吋の屈折式望遠鏡を購入して、新しく星雲や星團の形狀、位置等を觀察した。遂に、其の當時までの標準目錄であつた General Catalogue of Nebulae and Clusters (略して G. C. とも言ふ。ジョン・ハーシエルが1864年に發表したもので、星雲や星團

5079個を含む)を改正せんぞ企て、ロス卿の援助を得て、此の大事業を1888年に大成し、英國ローヤル天文學會の記要(Memoirs)第49巻第一部に發表した。これは New General Catalogue of Nebulae and Clusters (略して N. G. C. と言ふ) といふ題のものであつて、當時確認せられて居つた星雲や星團7840個を含み、出版後、忽ち、ハーシェルの G. C. 目録の代りとして一般に用ゐられるに至つた。近年、ドライヤー氏は更に新時代の發見にかゝる多くの星雲と星團とを纏めて、

1895年には Index Catalogue of Nebulae and Clusters

(略して I. I. C. — 1529個を含む)、又、

1907年には Second Index Catalogue of Nebulae and Clusters

(略して 2. I. C. — 3857個を含む)

を發表した。此れ等 N. G. C., I. I. C., 及び 2. I. C. の三つは、現今、星雲や星團の標準目録と見なされ、國際天文同盟の承認を経て、一般に用ゐられてゐる。

ドライヤー氏はダンシンク天文臺に在職の頃、ドイツから發行されるナハリヒテン誌の振はないのを慨して、R コープランドと協力し、新しく Urania (ユレーニア) といふ天文學雜誌を1880年に發刊したことがある。後、此のユレーニアなる名が多少迷信めいてゐるに氣が付いて、表題を Copernicus (コパーニカス) と改めた。そのうちに、ドイツでは A. Krüger が1882年にナハリヒテンの主幹に就任して面目を一新することになり、フランスでは E. Mouchez (ムシェ) と F. Tisserand (テスラン) とが Bulletin Astronomique を1884年に發刊し、アメリカでは Gould (グルド) が1886年から Astronomical Journal を復活させたので、前記のコパーニカスは、僅か三ケ年の壽命を以つて、1884年に廢刊となつた。

ドライヤー氏は此のコパーニカスの發刊中、天文學の歴史に關する研究をして、殊に、支那の北京天文臺の觀測器械や、オイラーの1744年の彗星研究や、歳差恒數の研究などを發表したが、其の後は益々天文史の調査研究を進めた。天文史家としては昔しから、J. B. Delambre (ドラムブル)、C. L. Ideler (イデラー)、G. Schiaparelli (スキアパレリ)、R. Wolf (ラルフ) 等が有名であるが、ドライヤー氏は此等の人々に繼ぐ近世の史家として立ち、先づ1890年には Tycho Brahe 傳を著し、1906年には History of Planetary Systems from Thales

o Kepler (ターレスより ケプラーまでの 遊星系史) を著し、最近1913年以來 Tycho Brahe 全集を出版する計畫をたて、全14巻のうち、第十巻までは既に發行済みとなつてゐる。尙、氏は1912年には W. ハーシェル全集の編輯委員となり、1920年には Royal Astronomical Society (ローヤル天文學會)の百年史の編輯委員としても大に盡力した。

ドライヤー氏は1916年にアルマー天文臺長を辭し、後、オクスフォードに移つて、専心、歴史の研究にふけつたが、オクスフォード大學は氏に M. A. の名譽學位を贈り、ベルファスト大學も亦氏に D. Sc. の學位を贈つた。又、1916年にはローヤル天文學會から金鐙を贈られた。尙、氏は1923年から1925年まで二ケ年間はローヤル天文學會の會長であつた。

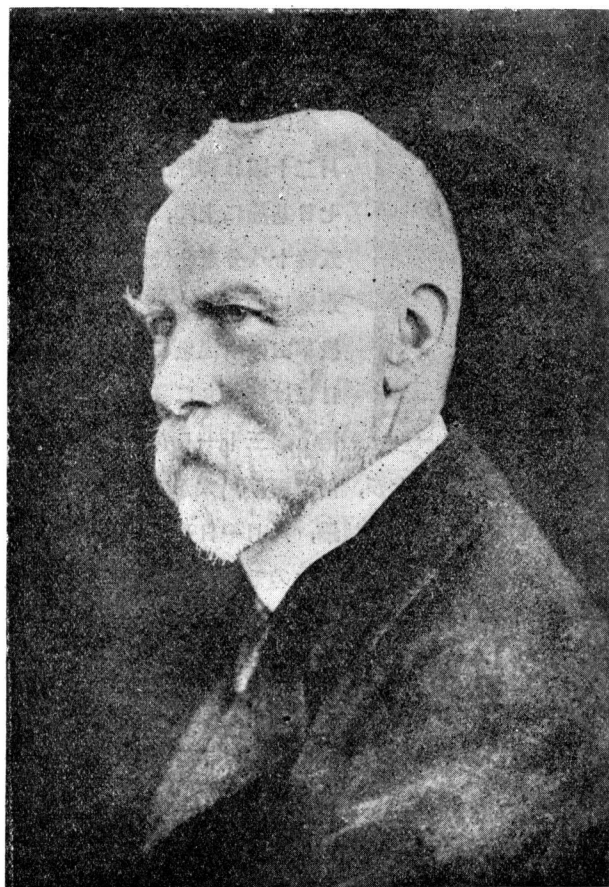
ドライヤー氏の書いた文書は廣い社會に讀まれ、其の言行は多くの友人たちを喜ばせた。氏は、1875年、バー城で John Tuthill 氏の息女 Katherine と結婚したが、此の夫人は1923年一月に死去し、ためにドライヤー氏の悲嘆は最近も尙癒えなかつた。氏の逝去は一般の天文家や朋友たちの大なる悲しみである。氏には三男一女がある。長子 John は陸軍大佐で、大戰中、フランスに出征し、後、陸軍省の砲兵部長となつた。今は南部重砲兵司令官である。次男 Frederic は海軍少將で、大戰中、ジャトランド沖の海戦にはジェリコー提督の座乗した旗艦 Iron Duke の艦長であつたが、今は海軍省の一高官となつてゐる。三男 George は大戰中、初め、印度の北西國境に砲兵隊を指揮する大尉であつたが、後、東アフリカに移つた。今はコルチエスターの近衛砲兵第七十八野砲隊長である。息女はアルマー郡ダータンの判事 W. Shaw-Hamilton (ショーハミルトン) 氏に嫁してゐる。又、オクスフォード大學の病理學教授 Georges Dreyer 氏は氏の從弟に當る。

御 知 ら せ

小生は去る十二月九日、[京都市新一條]へ移轉しました。帝國大學の正門の前の通り筋で、即ち、吉田神社の正面の鳥居から、まづすぐに西へ續く街路です。宅は大學正門から西へ四丁、又、万里小路の辻から西へ六軒目、鴨川の川端からは東へ三丁です。

1626年12月20日

山 本 一 清



星雲學者故ドライヤー博士
1852—1926